

# 教育研究業績書

2020年07月16日

所属：日本語日本文学科

資格：教授

氏名：影山 尚之

研究分野	研究内容のキーワード
日本文学	万葉集, 上代散文
学位	最終学歴
博士 (文学 (日本文学)), 文学修士	関西学院大学大学院 文学研究科 日本文学専攻 博士課程 満退

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
1. ミニツペーパーを活用した、学生—教員間のコミュニケーションの確保	2012年04月から現在	出席確認を兼ねて、毎時ミニツペーパーを配布し、学生に感想・意見・課題に対する応答などを書いてもらい、また次時にそれを紹介・評価することによって授業の双方向性の確保をはかっている。
2. 初年時導入教育の実践	2011年04月から2012年03月	園田学園女子大学短期大学部における授業科目「基礎教育」で初年時導入教育を実践。大学で学ぶことの意義・方法・態度、また基本的リテラシー能力の向上などが主な内容である。
3. 税務大学校大阪研修所における文章法授業の担当	2011年から現在	税務大学校大阪研修所における教育課程「文章法」を担当し、税務に携わる職員にとって必須の言語運用能力恒常のための授業を展開している。
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. 『新訂日本語と表現と工夫』の作成	2008年03月15日	大学等における日本語表現 (文章表現) のテキストとして作成したもの。影山担当は第一章「日本語を考える」(p7-15)、第六章「敬語」(p42-53)、第十章「論文・レポートの書き方」(p77-84) 十四章「挨拶・スピーチのことば」(p111-118)。
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		
1. 生涯学習への積極参画	2000年04月から2012年03月	園田学園女子大学における生涯学習活動に参画。とくに平成12年より開設した「シニア専修コース」(3年制)に積極参画し「日本文学I」を担当。教室内の講義にとどまらず学外見学を取り入れて立体的に展開した。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. 高等学校教諭一種免許状 国語	1985年03月	
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. 歌のおこない 萬葉集と古代の韻文	単	2017年08月25日	和泉書院	歌という様式に表現者が何を託そうとしたか、どのようにことばを紡ぎだしてそれぞれの歌が成り立っているのか、そこに織り込まれた心は読者にいかに届いているのか、を考察。新稿「緒言 歌のおこない」のほか既発表論文14編を収録した。
2. 上代写経識語注釈	共	2016年02月26日	上代文献を読む会編 勉誠出版刊	奈良時代に書写された経典の奥に記された識語 (跋文) について、訓読・現代語訳・注釈を施し、問題点を論じたもの。影山担当箇所はp31-54、p123-128、P163-166、p196-198、p292-298、p484-496および「あとがき」。
3. 萬葉和歌の表現空間	単	2009年10月	塙書房	平成17年に奈良女子大学へ提出した学位請求論文を改訂して出版したもの。和歌の表現がどのような言語空間を織りなすかということにつきテキスト論の立場から各作品を分析した。第一章「贈答歌と宴席詠の表現空間」では贈る歌と答える歌との呼吸、相手の詠を引き出す要因の内在、場面に適合する用語の選択、古歌誦詠の意図などを析出。第二章「和歌の編集」では歌群の編集原理の追究および和歌説話形成の力学の解析につとめた。第三章「歌ことばの

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
4. 万葉集の今を考える	共	2009年07月	新典社	表現性」では歌ことば「奥山」「三輪の杉」「寒し」などに付帯するイメージを明確にとらえようと試みた。全20編を収録するうち、既発表論文17編（うち査読付論文は7編）、新稿3編（序論および第三章第三論、第四論が相当）。 美夫君志会創立70周年を記念し、万葉集研究の過去を総括するとともに現在の動向を正確に把握し、将来のありかたを見据えようとして企画された書。美夫君志会常任理事が中心となり執筆編集したもの。影山の担当は8「歌の家、風流の継承」のコーディネートで「風流の系譜と万葉集—市原王を中心に—」（p263-277）を執筆。共著者は、村瀬憲夫、身崎寿、神野志隆光、内田賢徳、犬飼隆、乾喜彦、大脇由紀子、大浦誠士、影山尚之、池田三枝子14名。
5. 改訂日本語と表現の工夫	共	2006年3月	双文社出版	大学等における日本語表現（文章表現）のテキストとして作成したもの。影山担当は第一章「日本語を考える」（p7-15）、第六章「敬語」（p42-53）、第十章「論文・レポートの書き方」（p76-84）第十四章「挨拶・スピーチのことば」p111-118）。
6. 高橋氏文注釈	共	2006年3月	翰林書房	上代文献を読む会（代表・井村哲夫）における共同研究成果の公表。本朝月令・政事要略等に引用され逸文としてのみ残る高橋氏文につき本文を校訂するとともに詳細な注解を加え問題点を論述したもの。影山は編集責任者として関与、月令1-3の注解（p77-90）および「解題『高橋氏文』」（p207-227）の執筆に加え、全体の原稿調整・編集を行った。共著者は、井村哲夫、廣岡義隆、村瀬憲夫、遠藤慶太、西崎亮、影山尚之ほか。
7. 風土記逸文注釈	共	2001年2月	翰林書房	上代文献を読む会（代表・井村哲夫）における共同研究成果の公表。釈日本紀、萬葉集注釈などに引用されて残る古風土記の逸文について、その史料性の検証を行ったうえで、本文の校訂、訓読、現代語訳、語釈を施し、それぞれの問題点を論述したもの。影山は編集委員に加わり、提出された原稿の点検と編集を行った。執筆箇所は「稻倉山・稻椋山・土蜘蛛」（p72-84）、「阿蘇郡」461-482）、「蘇民将来」（p744-752）。共著者は、井村哲夫、廣岡義隆、辻憲男、真下厚、影山尚之、蔵中進ほか。
<b>2 学位論文</b>				
1. 萬葉和歌の表現空間	単			
<b>3 学術論文</b>				
1. 軍王の歌—舒明天皇代の行幸歌—	単	2020年03月20日	武庫川国文第88号	
2. 伊勢物語八七段「むかしの歌」と萬葉集・石川少郎歌	単	2019年11月01日	武庫川国文第87号	
3. 万葉集の作品論的研究	単	2019年05月01日	『万葉をヨム 方法論の今とこれから』笠間書院	
4. 大津皇子移葬の史と詩	単	2019年04月05日	史聚 第51号	
5. 坂上大嬢に贈る歌—距離の感覚と作品形象—	単	2019年03月31日	萬葉第227号	
6. しまくま山	単	2019年03月20日	武庫川国文第86号	
7. 「山之常陰」覚書き	単	2018年11月01日	武庫川国文 第85号	
8. あり通ひ仕へ奉らむ万代までに—巻十七、境部老麻呂三香原新都讚歌—	単	2018年05月30日	井手至博士追悼 萬葉語文研究 特別集	
9. 悪女になるなら—紀女郎の「怨恨歌」と中島みゆき	単	2018年03月13日	武庫川国文 第84号	
10. 万葉和歌と「食」	単	2017年3月25日	高岡市万葉歴史館論集17	
11. 暁と夜がらす鳴けど—萬葉集巻七「臨時」歌群への見直し—	単	2017年3月1日	萬葉語文研究第12号	萬葉集巻七雑歌部に位置を占める「臨時」歌群12首には譬喩を含む歌が多く、それぞれの歌意を汲み取りにくいことに加え、題意「臨時」の意図するところも明らかでない。本稿では、土屋『萬葉集評釈』の試解を部分的に踏まえつつ、各歌の理解を探りながらそれぞれの「時」の内実・意味を探ろうとした。
12. 佐保川のほとり—坂上郎女の見た風景—	単	2017年2月28日	武庫川国文第82号	坂上郎女と藤原麻呂の贈答をとりあげ、郎女作歌に集中的にうたわれる「佐保川」の風土・環境を検討するとともに、「佐保」に拘泥するうたい方を掘り

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
13. 三輪河辺に大神高市麻呂を送る	単	2017年10月25日	武庫川国文第83号	下げることで麻呂に向けて発信されたメッセージの「含み」を析出しようとした。
14. 萬葉集巻九雑歌冒頭部の意匠	単	2016年10月	武庫川国文第81号	万葉集巻九に収録される、大神高市麻呂長門下向時の送別宴歌について、まずその場面である「三輪河辺」の風土的意義を確かめ、一見すると典型的に映る表現を検討して、見送る人、旅立つ人の心をそれぞれ解析した。
15. 「和」する家持	単	2016年03月10日	武庫川国文第80号	萬葉集巻八秋雑歌部所収一五五四、一五六三、一五六五家持歌に関する考察。雑歌における唱和の持つ意義についてそれぞれ考えられるところを述べた。
16. 黒日売のこころばせ—仁徳記・黒日売をめぐる歌物語—	単	2015年11月30日	武庫川国文第79号	古事記歌謡52～56の正確な正誤解を目指す。
17. 萬葉集の天平十年—石上乙麻呂、元興寺僧、豊嶋采女—	単	2015年11月28日	京都語文第22号（佛教学国語国文学会）	万葉集巻六にみる天平十年の意味。石上乙麻呂関係歌群への考察が中心となる。
18. 誇張的恋情表現の社会性—「千たび」「千への一へも」「心に乗る」—	単	2015年06月01日	国語と国文学第92巻第6号	萬葉和歌は激しい恋情を誇張している場面に「千たび」を好んで用いるが、平安時代和歌になるとそれは著しく減退する。「千への一への」の慣用表現はいっそうその傾向を強くし、平安時代和歌にはあらわれない。それは、ある表現を支える社会の差を投影しているといえる。「心に乗る」についても同様のことが言えるが、こちらは後撰集において再評価される。抽象と具象の違いが社会性獲得に関与していると見通される。
19. 跡見の岡辺のなでしこが花—歌体の選択—（査読付）	単	2014年9月30日	萬葉語文研究第10集（和泉書院）	萬葉集巻八・秋雑歌紀鹿人作1549歌に関する考察。当該歌が旋頭歌体を採用していることにつき、従来はそこに積極的な意味・意図を見ようとしなかったが、1首は諧謔をこめた独特の発話とみるべきであり、その内容と整合する歌のかたちとして意図的に旋頭歌を選択したのだと把握するべきである。
20. 八代女王の禊ぎ	単	2014年11月01日	武庫川国文 第七十八号	八代女王が聖武天皇に献じた626歌には下句に異伝を伴う。天皇に献呈する和歌に異伝があるというのは奇妙なことである。本稿では「ふるさと」の語性の検討を通して一首の意図を探るとともに、異伝が本文歌とともに天皇に贈られたものという見直しを立てた。
21. 倭建命薨去後悲歌と「挽歌の源流」	単	2014年10月20日	萬葉集研究第35集（塙書房）	古事記中巻景行天皇倭建命関係説話にあらわれる、いわゆる「大御葬歌」（記34～37）について、従来はこれを万葉挽歌の源流と見なす向きがあったが、誤りである。当該歌は、倭建命薨去後に駆けつけた妻・子らの、悲嘆と狼狽のさなかで発せられたたどどしい言辞として詠まれるよう仕組まれているのであり、4首に共通して見られる特異な韻律はかかる企図に基づく物と把握するべきである。
22. 聖武天皇と萬葉の和歌	単	2013年3月25日	高岡市萬葉歴史館叢書25 聖武天皇の時代	万葉和歌史における聖武天皇および聖武朝の占める意義を再確認したもの。前代において天智・天武系諸皇子の周辺に組織された文人知識人たちが聖武朝前後には機構化され聖武宮廷の風流をリードする役割を帯びていること、聖武天皇自らの作歌にもかかる風流が実現していること、などを述べた。
23. 門部王の詠物二首について	単	2013年11月01日	武庫川国文 第77号	萬葉集巻三・三一〇歌および三二六歌について考察したもの。いずれも題詞に詠作対象としての景物が示されながら歌文は恋情に収束する共通性をもつ。それが門部王の詠物歌の特質と把握されることを述べた。
24. 人に恋ふる笠女郎	単	2012年11月	武庫川国文 第76号	万葉集巻四笠女郎歌群の形成に際して「人」の語の有する表現性が重要な機能を果たしていることにつき論じた。
25. 上代写経識語注釈（その十四）説一切有部俱舍論卷第二十一	単	2012年06月	続日本紀研究398号	『奈良朝写経』所収「説一切有部俱舍論卷第二十一」識語について、本文を翻刻したのち本文に加点を施し、訓読・現代語訳を付して、問題となる語・事項を解説したのち、問題点を論じたもの。
26. 萬葉集巻二相聞部の構想（査読付）	単	2011年12月	国語と国文学第88巻第12号	萬葉集巻二相聞部が古事記下巻を継承して編集されているという伊藤博の知見を継承し、それぞれの詠歌が作者とともに何を語るべく配置されているかについて論じた。
27. 額田王三輪山歌と井戸王即和歌	単	2011年10月	萬葉集研究第32集（塙書房）	「額田王下近江国作歌井戸王即和歌」と題される詠歌について従来は17・18歌を額田王作歌、19歌を井戸王即和歌であると理解してきたが、19歌に「和歌」としての要素が見出し難いため、種々空想を交えた恣意的論議が交わされてきた。しかしかつて松田好夫が論定したように17歌を額田王作歌、18、19歌を井戸王作歌と認定すれば説明は容易なものであり、無理な解釈を施す必要は解消する。
28. 草香山を越える（査読付）	単	2011年06月	萬葉第209号（萬葉学会）	萬葉集巻八にあつて特異な様態を示す「草香山歌」

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
29. 猪名川の沖を深めて	単	2011年03月	笠間書院『風土の万葉集』	(1428) および「桜花歌」(1429～30)について、それぞれがともに若宮年魚麻呂の資料に由来する可能性を指摘したうえで、両歌にうたわれる状況が神亀天平年間における平城京―難波宮間を頻繁に移動するみやびやかな官人貴族の旅であることを論証。 高岡市万葉歴史館の論集、依頼により執筆したもの。古代の下猪名川流域が木材や食糧など物資の流通センター的機能を有しつつ中央政権と密接連携していたことを諸史料により確かめたのち、萬葉集巻16・3804～3805和歌説話の構想を「片田舎の夫婦の悲恋物語」として把握し、猪名川下流域が舞台に選ばれていることの意味を明確にした。
30. 卷八の相聞贈答―一六三三～一六三五を中心に―(査読付)	単	2010年10月	美夫君志第81号(美夫君志会)	萬葉集相聞部に収録される作品のうち、贈答形式を保存して配置されるものに関してはディスコースとしての観察を求めていると把握される。そうした観点から本論文では1633～1635歌を再検討した。「或者」が「尼」に贈り「家持」が下句を応じたという特殊な様態の贈答がどのような要請に基づいて実現しているのか、三者の意図と呼吸はどうか、ということについて先行研究の問題点を検証しながら述べた。
31. 上代写経識語注釈(その二)大般若経巻第二百六十七	単	2010年06月	続日本紀研究第386号	長屋王発願大般若経巻第二百六十七(いわゆる神亀経)について、翻刻・本文加点・訓読・現代語訳を施し、問題となる語・事項を解説して、問題点を論じたもの。
32. 忌部首黒麻呂とその友―巻十六和歌説話の構想―	単	2010年03月	叙説第37号(奈良女子大学)	「夢裏作歌」の題をもつ384歌は歌の表現も特殊であり、左注に示される作歌事情も特異である。それは和歌説話ゆえということでもあるのだが、「友」に贈るには不似合いなこの表現はどこから選択されたのか。その問題意識に基づいて検討した結果、巻6・1008歌のパロディとして仕組まれたものという結論を得た。あわせて、巻十六和歌説話の構想について見通しを記した。巻十六和歌説話中に実名をもってあらわれる人物は多く巻1～8作者判明歌巻に既出しているものであり、それらを前提として説話を構成している点を指摘した。
33. 丹生女王作歌二首(五五三、五五四)の諧謔性(査読付)	単	2009年10月	萬葉語文研究第5集(和泉書院)	丹生女王が都より大宰府の旅人におくった2首の詠は、旅人の和歌が記されないことに加え、「吉備の酒」「眞寶」の実態がわからないため、正確な理解を導くことが難しい。しかし、表現解明の手がかりは旅人を「古人」と決めつける点、「賜らむ」とあえて敬語を用いる点にあると思量される。その観点から用例等を分析したうえで、先行諸説の問題点を検討し、2首に濃厚に成り立つ諧謔性を析出しようと試みた。
34. 藤原役民歌と御井の歌	単	2009年07月	明日香風第111号	藤原宮遷都を契機とした作品として「藤原宮役民歌」「御井歌」を萬葉集巻一は収録する。従来この2作品は、作者名を記さないことに疑問が抱かれ、あるいは柿本人麻呂の作ではないかという推測が下されたりしたが、むしろ具体的作者を示さない「無名性」こそが作品の本質を主張しているのであることを論じた。
35. 日本霊異記上巻第二縁狐女説話と和歌	単	2009年03月	朱第52号(伏見稲荷大社)	霊異記においていわゆる「道場法師系説話」の一端をなす第二縁は異類婚姻を契機としており、仏教的要因が稀薄であるととらえられることが多い。しかし、犬の子が狐を見あわすという展開に因果の要素を見ることが可能で、異類婚姻の型は意図的に変形されているのであり、仏教説話の範疇で理解することが可能である。とくに後半に持ち込まれる和歌が説話内に占める位置を検討することで、本説話の主題と構想を明らかにしようとした。
36. 鴨君足人「香具山の歌」再考	単	2008年03月	そのだ語文第7号(園田学園女子大学懇話会)	「鴨君足人香具山歌」(3-257～260)に関して、影山自身かつてそれが藤原京廃絶後の荒廢を嘆じた作品であろうと論じたことがあったが、それを再考したもの。従来は当該作品について荒都歌もしくは高市皇子追悼歌のいずれかという二者択一で議論されてきたのだったが、表現解析から得られる結論はそのいずれでもなく、題詞に示すとおり「香具山」を主題とした作品とみられるのであり、作品外情報を不当に導入して読解するべきではないことを述べた。
37. 豊嶋采女の恋の歌(査読付)	単	2008年01月	国語と国文学第一85巻1号	萬葉集巻6に右大臣橘家宴歌4首が載るが、うち後半2首は右大臣が披露した古歌であり「故豊嶋采女作」とであると伝える。なぜこの日に豊嶋采女の詠が披露されるに至ったのか、また前置される2首の新作歌とはどのように関係するのか、ということについて考察した。とくに「故」字が冠されているところに意図があると予測し、采女による悲恋と死が享受の背

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
38. 齊明天皇四年十月紀伊国行幸と和歌	単	2007年05月	『初期万葉論』（笠間書院）	景にあると推測した。また、その古歌誦詠の契機が、主客による挨拶歌にみられる「奥まへて思ふ」という心情表出にあることを指摘した。 萬葉史の100年を通じて正史に記録された紀伊国行幸は4回のみ、いずれも特別な意義を有する。その初回に相当する齊明4年10月の行幸は和歌史のうえで重要な画期となる。萬葉集ではいわゆる初期万葉にあたるどころから、その詠歌（主に1-9~12）について呪術的性格を指摘するのが一般であったが、表現を詳細に解析すれば、むしろ旅の開放性を見出すべきである。初期万葉歌左注にしばしば引用される類聚歌林の記述を解釈に応用する態度も、従来は「代作」また「歌の共有」という古代性を重視してきたが、誤りである。萬葉集と類聚歌林とは異なるテキストなのであって、歌林の情報を無批判に追うようすべきでないことを述べた。
39. 大伴家持のコミュニケーション技法（査読付）	単	2006年11月	美夫君志第73号（美夫君志会）	萬葉集末4巻には家持が主催し、あるいは客として招かれた宴席を場とする詠歌がきわめて多い。そこで家持が詠出した歌が他者の詠歌とともに配列されるのだが、その配置の仕方はおそらく同日の宴の空気を伝えるようにという配慮があるだろう。その見通しに立って観察すると、家持が他者の詠作をどのように受け取って自作歌を詠んでいるか、家持によるコミュニケーションがいかに巧まれ成り立っているかが浮かび上がってくる。そうしたことをふたつの歌群に即して述べた。
40. 東海道をゆく万葉の旅人	単	2006年03月	『道の万葉集』（笠間書院）	高岡市万葉歴史館編集の左記書に依頼により執筆したもの。古代の東海道が文字通り「海の道」であることを再確認し、それを利用した東国への旅が萬葉の時代にすでに頻繁であって必ずしも「身を要なきもの」の住む僻遠の地とは認識されていなかったことを論定。高橋虫麻呂ほかの律令官人による旅の歌を取り上げてその特質を考察した。
41. 交差する歌謡と和歌	単	2005年07月	国文学解釈と教材の研究第49巻第8号（学燈社）	国文学解釈と教材の研究編集部より依頼され執筆したもの。古代における和歌と歌謡がどのように領域を分担しているのか、あるいはいかに交差しているのか、ということ考察したもの。古今集賀歌に収められる「わがきみは千世に八千世に」や大歌所御歌「新たしき」などを例とし、両者が積極的に越境する側面に焦点を当てて論じた。
42. 聖武天皇の歌	単	2005年05月	『セミナー万葉の歌人と作品』第11巻（和泉書院）	聖武天皇作歌について、従来の研究史を総括し、残された問題点を指摘したもの。とくに相聞往来、社交的儀礼歌、東国行幸関係歌の3項について要点を整理し、今後の研究の方向性を示唆した。
43. 万葉集の皮膚感覚、生理感覚—歌語サムシの確立—（査読付）	単	2003年11月	美夫君志第67号（美夫君志会）	皮膚感覚および生理感覚をあらわす形容詞（温度形容詞）にはアツシ・アタタカシ（アタタケシ、アタタカナリ）・スズシ・ヌルシ・ツメタシ・サムシがあるが、萬葉集にはアツシ1例、スズシ2例であるのに対しサムシが60例見られ、著しく偏った傾向を示す。この現象の意義について、平安時代和歌や源氏物語を参照しつつ考察した。一般に生理感覚をあらわすことばは非和歌的ということで排除されるが、サムシに限ってはむしろ優美で都会的なニュアンスを帯びること、中国文学の受容を契機に歌語化を遂げていること、を確かめた。
44. 恋夫君歌（巻十六・三八一一～三八一三）の形成（査読付）	単	2003年07月	萬葉第184号（萬葉学会）	巻十六の和歌説話中に位置を占める「恋夫君歌」（3811～3813）に関して、歌と左注との検討を通し、その形成過程についての見通しを立てた。
45. 額田王九番歌について	単	2002年12月	園田学園女子大学論文集第37号	
46. 天平勝宝三年正月三日宴の古歌誦詠	単	2002年03月	高岡市万葉歴史館紀要第13号	天平勝宝三年正月三日に催された宴席において、新作歌のほか古歌が久米広縄・遊行女婦蒲生によって披露されている。その古歌誦詠の意義については従来さまざまに説かれているが、いずれも十分な納得に達するものとはいえないため、本稿では、家持離任（離越）の悲哀と古歌の内容との間に接点を求めようと試みた。
47. 家持の初期相聞長歌について（続）	単	2002年03月	そのだ語文第1号	大伴家持が、妻・坂上大嬢におくった巻八・一六二九～一六三〇歌について、恋の贈答でありながらなぜ「長歌形式」を採用したのかという問題意識から考察。従来はそれを家持の独善的な営みと解する向きが多かったが、作品を解析してゆけば、随所に大嬢への配慮が巡らせられてあり、円滑なコミュニケーションをねらった作品であることが了解される。
48. 天平宝字元年三月三形王宅宴席伝誦歌（査読付）	単	2001年02月	萬葉第176号（萬葉学会）	萬葉集末4巻に収められる集宴歌をみれば、創作歌のほか古歌の誦詠が盛んに行われていることを知る。それは、場面に応じた適切な歌だということを選

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
49. 長皇子の人と歌	単	2000年12月	園田学園女子大学論文 集第35号	ばれているはずである。本論文では巻20・4488～4491三形王宅宴席詠をとりあげ、このうち古歌に相当する4491歌がなぜ当座で誦詠去れることになったのか、そもそも当座の宴席のテーマはどうであったか、ということを残された詠歌の表現から辿ってみようとした。宴席歌の編集にあたっては、そのような主題が享受者に正しく伝わるよう配慮されているはずだという見通しに立ったものである。
50. 神亀五年の四首の難波行幸歌	単	2000年12月	『セミナー万葉の歌人と作品』第6巻(和泉書院)	万葉史において長皇子とその子孫系統が重要な位置を占めていることを確認したうえで、長皇子の独特な歌風を宴席詠や行幸関係歌から析出しようと試みた。
51. 「橘の寺の長屋」と「橘の照れる長屋」(査読付)	単	2000年11月	美夫君志第61号(美夫君志会)	万葉集巻十六の和歌説話について論じた。三八二二～三八二三歌は椎野長年にかかわるもの。左注にその詠作事情が説話ふうに語られる。説話の分析と和歌の用語解析を通して、三八二二歌が三方沙弥の歌(2・一二三～一二五)のパロディとして仕組まれたものであること、椎野長年はその意図をわきまえず無風流な改作を試みたこと、その愚行が読み手の笑いを誘うものであったこと、を述べた。
52. 大伴家持の初期相聞長歌について	単	2000年03月	園田国文第21号	巻8・一五〇七～一五〇九歌に関する論考。坂上大嬢への相聞往来を目的とした歌にあえて長歌型式を採用した意図について、そこに巡らされたユーモアを抽出することで解明しようとしたもの。
53. 柿本人麻呂歌集の位置—略体歌を中心に—	単	1999年12月	『万葉史を問う』(新典社)	柿本人麻呂歌集の表記には助辞を極端に省略したものと比較的丁寧に使用したものと2類があることは古くから知られている。近年は稲岡耕二氏によってそれが時代的変遷に忠ずるものであると論じられ、略体歌が先行し非略体歌に展開したうえで作歌の表記へと変化する、ととらえられたが、本論文ではそのことの問題点を用例に則しながら示した。二つの表記は同時並行してありうることを、歌の内容にも目を向けつつ考証した。
54. 弓削皇子の歌	単	1999年12月	『セミナー万葉の歌人と作品』第3巻(和泉書院)	弓削皇子作歌および弓削皇子薨去時挽歌について、先行諸説を検証しつつ、読解の方向性を示したもの。とくに119～122「思紀皇女御歌」について、それが第三者によって編集された歌群であることを指摘した。
55. 大伴家持と坂上大嬢の贈答	単	1999年03月	園田国文第20号	大伴家持と坂上大嬢との間に交わされた一六二四～一六二六歌について、その表現にこめた意図を探ったもの。大嬢による一六二四歌は歌として破綻しているといつてよいほどに稚拙であり、その欠陥を補うように巧まれたのが一六二五、一六二六歌であること、一連は最終的に家持によって編集された「作品」であって、一次的な贈答としてはありえないこと、を述べた。
56. 高市黒人の八首羈旅歌群	単	1998年03月	園田国文第19号	高市黒人羈旅歌八首については、そこにどのような編集原理が働いているのかについて諸説が対立している。しかし、旅の歌である以上、うたわれた地名に鍵があることは動かない。そのことを確認したうえで、なにゆえこの八首が一括されたのかを問題とし、人麻呂羈旅歌八首に瀬戸内海山陽道・南海道の旅が盛り込まれていることとの対比においてとらえるべきことを論じた。
57. 神亀五年難波宮行幸時作歌試論(下)	単	1997年03月	園田国文第18号	「神亀五年難波宮行幸時作歌試論(上)」を承け、各歌の譬喩の内実を考察し、4首誦詠の場面を想定したもの。「山守」「かがよふ玉」「韓衣」など散りばめられた語が想定させるのは風流の芸能・歌壇であり、難波宮行幸で催された歌壇において4首がうたわれたのであろうと推定した。
58. 聖武天皇と海上女王の贈答歌(査読付)	単	1997年03月	萬葉第160号(萬葉学会)	聖武天皇と海上女王との間に交わされた五三〇～五三一歌は、織り込まれた用語・表現に難解な部分があり、諸説動揺しているが、本稿はここに擲論・反発・切り返しといった、前期万葉相聞に普遍的に見られる贈答の呼吸が成り立っていることを見届け、あわせてその披露された場面について聖武朝特有の開放的な宴席を想定した。
59. 神亀五年難波宮行幸時作歌試論(上)	単	1996年12月	園田学園女子大学 論文 集 31号-I	万葉集巻六・九五〇～九五三歌について考察したもの。神亀五年難波行幸において制作されたこの4首は、譬喩を含む歌が多いこともあって、解釈が一定しない。作者についての情報も笠金村・車持千年の両者が左注に示され流動的。本稿は解釈の前提となることごとについて諸注釈を検討しながら整理を試みた。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
60. 黒人歌の享受と異伝	単	1996年11月	『高市黒人一注釈と研究一』（新典社）	高市黒人の作歌として万葉集内に留められる詠のうちには、作者に異伝を伴うものだったり、天平期に古歌として誦詠されるものであったりと、黒人実作とは断定しにくいものがある。それを「伝黒人歌」として別に扱うべきことを述べた。不安定な要素を抱える詠歌を一括して黒人の歌風を論じることの危うさを指摘した。
61. 晴れの日、曇りの日—万葉集のことば・ノート—	単	1996年03月	園田国文第17号	万葉集中に「雨」をうたうものは多いが、「晴れ」をうたうものはきわめて少なく、またそれは「雨」のあがった状態をいうものであり、夜空についていう場合にかぎられる。そのほか、「雲」「曇り」の表現を含め、天候に関する語・表現が万葉和歌においてどのようにあるかというところを概観した。
62. 遣新羅使雪宅満挽歌に関する試論（査読付）	単	1996年03月	美夫君志第48号（美夫君志会）	萬葉集巻15前半に収録される遣新羅使人歌群に関しては「実録風な創作」「虚構体」と見るべきことが先学によって説かれている。本論文は基本的にこれを支持しつつ、3688～3696雪宅満挽歌の形成および構成について考察した。当該挽歌は作者不明の長短歌を冒頭に置き、次いで葛井連子老による長短歌、最後に六鯖作長短歌が載るが、従来は冒頭歌が宅満への挽歌としてもっとも適正であると見られてきたのに対し、本論文はむしろ六鯖作歌が宅満の死去という現実即して最適格であり、前置される2組は編集時に追加された可能性があること、あるいはその対象も宅満ではなく別の使人の死を契機とした作であった可能性があること、などを指摘した。
63. 河村王弹琴誦詠歌	単	1995年07月	園田国文第16号	
64. 大后御歌—天智天皇挽歌続考—	単	1995年01月	園田語文第9号	天智天皇挽歌群中の倭大后作歌153歌について考察したもの。単純な対句によって構成された小型長歌だが、その表現は論理的には破綻しており、その要因として、原型に想定される旋頭歌を改作したためであろうと推定した。
65. 「高山」と「奥山」と—万葉集のことば・ノート—	単	1994年03月	園田国文第15号	萬葉集巻八・1655歌に「高山の菅の葉しのぎ」とうたわれ、巻三・299歌に「奥山の菅の葉しのぎ」とうたわれて、「高山」「奥山」が一見置換可能の語のように見えるところを問題にした。「奥山」が中古以降にも歌語として継承されるのに対し、「高山」は歌語としての成長を遂げることがない、その要因を探ろうとした。
66. ワニ氏の伝承と歌謡—春日袁村比売説話をめぐる考察—	単	1994年02月	『古事記研究大系 古事記の歌』（高科書店）	『古事記』下巻雄略天皇条末尾に位置する春日ヲドヒメの歌謡物語をめぐり、それがワニ氏に保有された伝承であったことを推定、その伝承が雄略天皇の物語に採り入れられて文芸化した筋道を考えた。
67. 万葉集四四七七番歌私解（査読付）	単	1994年01月	解釈第40巻第1号	
68. 万葉末期の哀傷歌—天平勝宝八歳池主宅の宴歌—（査読付）	単	1993年11月	上代文学第71号（上代文学会）	天平勝宝八歳十一月二十三日に大伴池主宅で催された宴席には、大原今城による新作歌のほかに「伝詠歌」四首が誦詠された。この、今城歌と伝詠古歌との意味上の連絡をどのようにとらえるべきか、という点について考察した。古歌四首はいずれも挽歌もしくは哀傷歌と解され、今城歌もまた、ある対象に向けられた恋情であるという点で、心情的なつながりが認められる。その対象は、聖武天皇をおいてほかにないと結論した。
69. 天智天皇挽歌私考 —倭大后作— 四七～一四九歌をめぐって—	単	1993年03月	園田国文第14号	天智天皇挽歌群の冒頭を占める倭大后作歌3首を考察対象とした論。147歌は題詞によれば天皇崩御前の詠ということになり、148歌の表現も天皇存命中を思わせる曖昧なありようであり、149歌も含めて3首は挽歌としての成熟を遂げているとは言いがたい、それは古代日本における挽歌の獲得が遅れるという事情にも起因しようが、あわせて当該歌制作環境の特殊性にもよるのであろう。3首の曖昧さは本来別個に成立していた歌を転用したことを暗示し、それは同時に3首が葬儀礼において誦詠された可能性を示唆するであろう。
70. 「しこめしつも」考	単	1993年03月	園田語文第7号	常陸国風土記茨城郡に収載された「高浜の」歌謡について、従来解釈の定まらなかった箇所につき、東国方言使用の可能性を勘案して、解析を試みた。
71. 聖武天皇「東国行幸歌群」の形成（査読付）	単	1992年08月	解釈第38巻第8号	天平12年聖武天皇東国行幸にあたって詠出された歌群（6・1029～1036）について考察したもの。当歌群は題詞の作り方にも歌の配列にも続日本紀の記載に照らして疑問点が少なくない。天皇御製の前に家持作歌が掲げられる点も行幸関係歌として不審がある。題詞・表現検討の結果得られた結論は、当歌群がいくつかの資料を統合する形で成り立っていること、配列にあたっては家持の歴史認識に拠って再構成されているらしいこと、歌群を貫く主題は「妹」

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
72. 山吹の立ちよそひたる山清水—十市皇女挽歌と三輪・土師—(査読付)	単	1992年03月	美夫君志第43号(美夫君志会)	への思慕出会ったと把握されること、である。十市皇女薨去時に高市皇子が制作したと伝える156～158歌は訓読・歌意把握ともきわめて困難である。本論文は訓読に問題のない158歌を主な観察対象とし、この挽歌に共通して三輪山神話の影響が見いだされることを指摘し、また葬送儀礼を担当する氏族・土師氏の神話伝承の投影も看取できることを確認して、当該挽歌制作の背後に土師氏の介在があるのではないかと推測した。ある種の転用によって成り立つ挽歌であった可能性に言及した。
73. 「しのふ」雑考—万葉集二九一番歌をめぐって—	単	1992年03月	園田国文第13号	万葉語「しのふ」には「思慕」の意と「賞美」の意の両面があることはよく知られているが、そのふたつの意味領域がどのように重なるかを確認したうえで、291歌の「しのふ」が担う意味・表現性を正確にとらえようと試みた。
74. 但馬皇女挽歌の再検討—その儀礼的背景—(査読付)	単	1991年11月	上代文学第67号(上代文学会)	但馬皇女薨去時に穂積皇子が制作したと伝える2・203歌について、その本文と訓読を再検討するとともに1首の制作の背景を推測した。当該歌第5句は西本願寺本その他に「塞為卷爾」とあり旧訓はセキニセマクニであったが、それでは歌意をとらえにくい点もあって、唯一金沢本にとられる「寒為卷爾」を是としサムカラマクニと訓むことが広く行われている。しかし本文処理としてそれは適切でなく、「塞為卷爾」に拠って訓を検討すべきである。「塞」字を採用してセキと訓むとき「猪養の岡」との関係が問題になるが、同地が但馬皇女の墓所であるなら、そこに年に1度の荷前が発遣されるのが古代のならいであったから、当該歌は降雪によって荷前使が猪養岡に向かえない状況を懸念するという発想によって詠作されているのではないかと、そしてその荷前にかかわる儀礼が当該歌制作の背景にあるのではないかと、ということ述べた。
75. さざなみの志賀さざれ波—弓削皇子挽歌続考	単	1991年11月	園田語文第6号	
76. 古事記恣読—「黄泉国」をめぐって—	単	1991年05月	近代風土第37号	古事記上巻イザナキによる黄泉国訪問段について、その空間がどのようにとらえられているか、また、「黄泉神」と「黄泉大神」とはいかに区別されているか、について見通しを述べたもの。
77. 黒人歌の再検討—家郷を偲ぶ—	単	1991年04月	日本文芸研究第43巻第1号(関西学院大学)	高市黒人の旅の歌には旅先の地名が必ずうたわれることと裏腹に、家郷思慕の情や妻恋をあらわにしないという特色がある。しかしそれは、黒人作歌が当時の羈旅歌一般の傾向と異なるということではない。巻3「羈旅歌8首」冒頭歌に唯一「もの恋し」という形容詞が用いられるが(270)、その旅愁はすべての黒人歌に共通であると見なされる。とくに「鶴」の鳴き声をうたったものが目立つが、鶴は多く旅先でその鳴き声を認知し、即座に郷里の妻を想起する素材であったと了解できるから、黒人は心情語を用いるのでなくそうした素材・題材を地名とともに詠み込むことによって間接的に家郷を偲ぶ情感を表出しようとしたのだと考えられる。
78. 弓削皇子挽歌小考	単	1991年03月	園田国文第12号	
79. 坂上郎女の旋頭歌一首	単	1990年11月	園田語文第5号	
80. 吉野の川の沖になづさふ	単	1990年03月	園田国文第11号	
81. 黒人の妻の「答」ふる歌	単	1989年11月	園田語文第4号	
82. 大伴家持越中時代作品考—布勢水海遊覧長歌をめぐって—	単	1989年03月	園田国文第10号	
83. 吹■刀自の歌—常にもがもな常をとめて—	単	1988年03月	園田国文第9号	
84. 中納言阿倍広庭の歌一首	単	1987年09月	園田語文第2号	
85. 鴨君足人「香山歌」小考	単	1986年10月	日本文芸研究第38巻第3号(関西学院大学)	万葉集3・257～259歌について、これを高市皇子薨去と結びつけて理解するものと藤原宮荒都をうたったと解するものが対立していたが、後者が穏当であることを、表現分析を通して主張した。
86. 禁止表現を持つ旋頭歌	単	1986年01月	日本文芸研究第37巻第4号(関西学院大学)	柿本人麻呂歌集を典拠とする旋頭歌には「な…そ(ね)」の禁止表現を持つものが目立って多い。それらに共通の発想形式がどこかによって由来するものか、について考察した。
<b>その他</b>				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 額田王三輪山歌と井戸王即和歌	単	2010年10月	上代文学会秋季大会(	



研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
2. 草香山を越える	単	2010年10月	於・慶應義塾大学 萬葉学会全国大会（於・高岡市万葉歴史館）	
3. 豊嶋采女の恋の歌		2006年11月	上代文学会秋季大会（於・学習院大学）	
4. 大伴家持のコミュニケーション技法	単	2006年07月	美夫君志会全国大会（於・中京大学）	
<b>3. 総説</b>				
1. 島の宮の嘆き	単	2019年03月06日	飛鳥の風たより 第20号	
2. 紹介 井村哲夫氏著『憶良・虫麻呂の文学と方法』	単	2018年10月31日	萬葉 第226号	
3. 猿丸大夫と万葉集	単	2017年07月15日	飛鳥乃風たより第16号	
4. 万葉の神、古事記の神		2016年05月20日	飛鳥乃風たより第12号	
5. わすれがたきふるさと	単	2014年08月	飛鳥乃風たより第7号	
6. 新刊紹介 梶川信行著『額田王と初期万葉の歌人』	単	2012年03月	史聚第45号	
7. 書評 大浦誠士著『万葉集の様式と表現』	単	2009年06月	国語と国文学第86 巻6号	
8. 万葉びとの温泉―旅情と哀愁と―	単	2009年01月～2009年09月	但丹歌人 第64巻第1号～第3号	
9. 三輪の神杉 万葉の杉	単	2008年01月	大美和第114号（大神神社）	
10. 聖武天皇の時代～文学・歴史・思想～	単	2007年03月	但馬国府・国分寺館年報第1号	
11. 大井重二郎氏の万葉地理研究とその功績	単	2006年03月	万葉古代学研究所年報第4号	
12. 平成10年学会展望 上代 万葉・第3期	単	1999年09月	文学・語学第164号	
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
<b>6. 研究費の取得状況</b>				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2013年04月01日2015年03月	萬葉学会編輯委員長
2. 2009年04月～現在	上代文学会理事
3. 2006年04月～現在	美夫君志会常任理事
4. 2002年04月～現在	萬葉学会編輯委員
5. 2000年04月01日～2006年03月	美夫君志会理事